

01. これからのビジネス環境は どうなる？

POINT

- 1 ビジネスの環境は大きく変わる過渡期にある
- 2 主体性を持って働くための3つの力を知る

戦後からこれまでの日本経済は、大きく次の3つの時期に分けられます。①復興から大きな高度成長を成し遂げた時期（1945～1973）、②安定成長からバブルへ進んだ時期（1974～1990ころ）、③バブル崩壊後からの長期低迷期（1990ころ～）です。国の経済規模を示す指標の1つである国内総生産（GDP）は2010年に中国に抜かれて以来世界第3位となっています。日本は国土が小さく、エネルギー資源が乏しいながら、①の高度経済成長期に技術・電子大国といわれる地位を築き、以来、経済大国の地位を維持してきました。

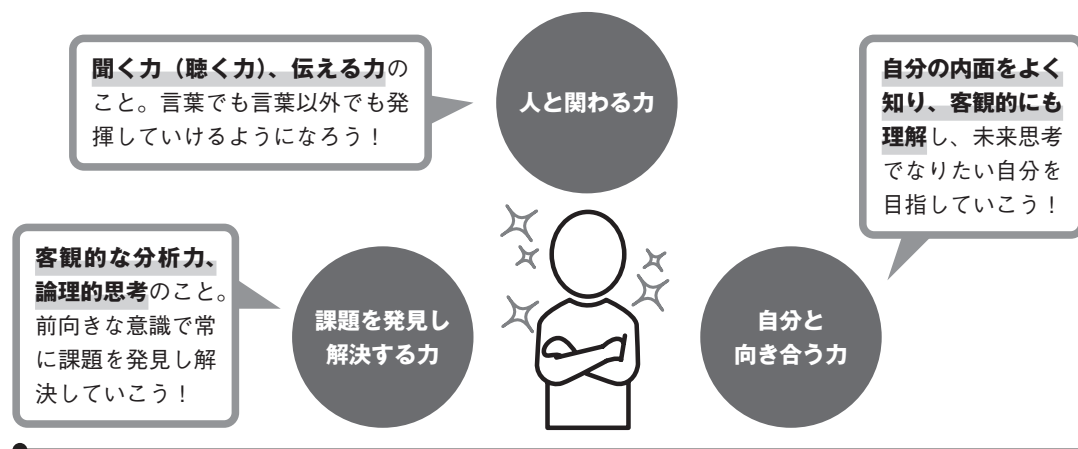
戦後にゼロから立ち上がったからこそ、①②の時期のビジネスパーソンたちは自分の価値観＝経営理念として束ねられ、上意下達を忠実に守り、企業の大きな成長を一丸となって成し遂げてきました。社員の労働への対価は給与だけでなくその会社に属すること自体であり、会社や仕事を何よりも優先させることで経済成長を支えてきたのです。

その後、社会が豊かになり人々の価値観が多様になるなか、③の時期を迎えました。企業が体力を失い、賃金のベースダウン、リストラ、失業、就職難などが起きました。終身雇用制度も崩壊しつつあるなかで、自分の理想を求めた転職が珍しくなくなっています。欧米型の成果主義導入などが人材流動に拍車をかけ、企業と個人の関係性は多種多様に変化しています。

ビジネス環境が大きく変わる過渡期にあって、これからのビジネスパーソンに必要な力は何でしょうか。それは「人と関わる力」「課題を発見し解決する力」「自分と向き合う力」の3つです。新人のうちは、常に周りから学び取る姿勢を忘れず、与えられた仕事にじっくりと取り組むなかで、この3つの力を確実に培っていくことができます。

主体性を持って3つの力を発揮していくことは、これからのビジネス環境を切り拓く鍵となるでしょう。

ビジネスパーソンに必要な力



02. 大変革期の世界

POINT

- 1 世界的な変革期を迎え、多くの課題を抱えている
- 2 現状を正しく知り、変化の先にあるチャンスを見逃さない

世界のビジネス環境は、欧米などの先進諸国が成熟期を迎えるなか、中国、インドなど新興国と呼ばれる各国が急激な経済成長を果たしています。これからの成長市場は発展途上国の多いアジア、アフリカ地域にシフトしていく可能性があり、世界経済は今後も成長を続けるでしょう。一方、世界中でかつてない規模の自然災害が頻発し、環境問題は世界共通のものになっています。人類中心の時代である「人新世」とも呼ばれる時代を迎え、地球人共有の問題が数多く横たわっています。

とりわけ脱炭素への取り組みは急務とされており、日本も2020年に、2050年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにする「2050年カーボンニュートラル宣言」を行いました。新型コロナウイルスのパンデミックや、予期せぬ戦争の諸影響から、進捗が遅れは見られるものの、多くの企業が具体的な目標を掲げて取り組んでいます。

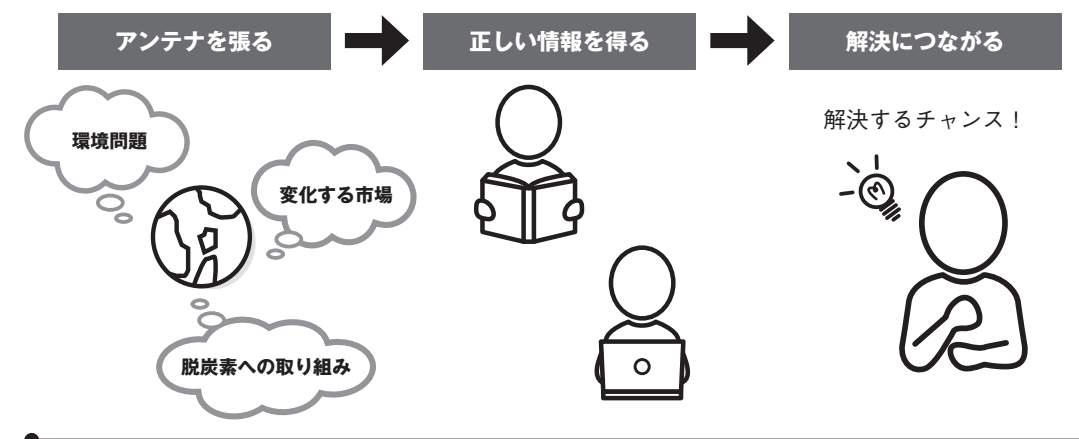
一方、このような状況でも第4次産業革命といわれる技術革新が着々と進行中です。インター

ネットやスマートフォンはすでに私たちの日常に欠かせないものとなりましたが、今後は、AI（人工知能）や自動運転、ロボット技術、宇宙開発技術が次々と実用段階に入り、私たちの生活環境は変化をしていくことでしょう。新たな技術が多くの課題を解決してくれることにも期待が膨らみます。

このように、変革期を迎えている世界では多くの課題が浮き彫りになっているわけですが、裏を返せば、それを解決するチャンスも同時に存在しているといえます。ですから課題解決のために「今、世界で何が起きているのか」にアンテナを張り、より正しい情報を得ていくことは極めて重要です。

これから日々の仕事に真剣に向き合うなかで、新聞や各種報道からできるだけ偏りない情報を得る努力を続け、変化の先にあるビジネスチャンスを見逃さず、さらには世界における競争力をどのように付けていくかを模索していきましょう。

課題からチャンスを見つける



03・未来への展望

POINT

- 1 人口減少や少子高齢化の社会的な流れを知り、未来を予測しよう
- 2 AIやロボットが活躍する近未来を見据え、必要なスキルを磨こう

ビジネスにおいて、社会の大きな流れを知り、将来を予測して動くことは重要です。

日本社会の流れとしてあげられるのは急激な人口減少と超高齢化です。日本の人口は2008年の1億2808万人を頂点に減少に転じ、2021年はピーク時から約258万人減少しました。さらに出生率の低下と、65歳以上の高齢者の増加により、2030年ころには日本人の3人に1人は65歳以上の社会になるとされています。

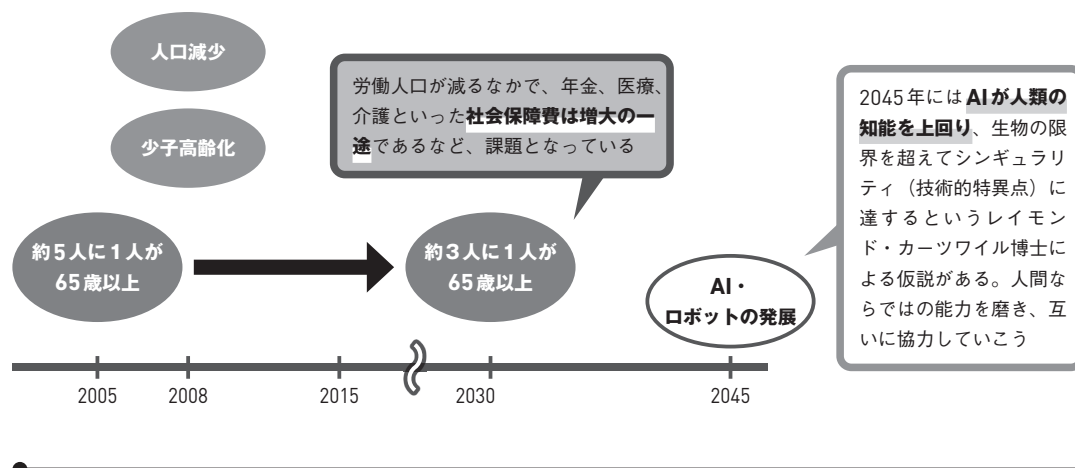
日本のみならず人口構造の高齢化は先進国共通の課題であり、今後の日本の舵取りに世界中から注目が集まっているところです。

労働人口を補う施策の1つとして、AIやロボットの活用が進展しています。2015年に発表された野村総合研究所と英オックスフォード大学の共同研究によると、2030年ころまでに日本の労働人口の約49%が携わる職種がAIやロボットなどで代替可能になるとしています。現在、スー

パーやコンビニなどでは、AIが自動で在庫管理・発注を行う店舗や、店内カメラなどで購入商品を自動読み取りしてレジを通さずに決済まで行える店舗も登場しています。また、飲食店でもロボットによる配膳など、無人化が珍しくなくなりました。

テクノロジーは、決められた作業を繰り返すことに長けているため、そうした領域の作業は今後も代替されることが予想されています。一方で、「コミュニケーション」や「創造性」、「共感性」を要する仕事はテクノロジーが苦手な分野であり、これからも人間の仕事として必要とされていくと予想されています。AIが人間のライバルになるのではなく、お互いに得意分野を担い、協力体制で社会をより良くしていく未来になることに期待が高まります。そのためにも私たちは人間ならではの強みを考え、日常の仕事のなかで能力を磨いていく意識が大切な時代です。

日本社会の大きな流れ



04・先端技術とリアル社会

POINT

- 1 AIの活用で人間の能力も拡張できる
- 2 バーチャル社会とリアル社会の両方で活躍できる2つの力を知る

近年の先端技術として注目されるIT技術にはAIやメタバースなどがあります。

機械学習をはじめとしたAI技術の発展により、自動運転、画像認識、将棋といった人間の知的活動にAIが大きな役割を果たしつつあります。AIを上手く活用できるようになると、人間の能力を拡張することも可能になります。たとえば、AIが周囲とのやりとりをすべて記録し学習するようになると、その人の認知機能が衰えてもAIが補佐し続けることができます。事務手続きにおいては本人が不在であっても本人らしい対応が可能になるでしょう。仕事の補佐役としても本人と同じ対応ができるAIであればとてもスムーズに運びます。

また、メタバースとは仮想空間のことです。高速のインターネット回線とVR（バーチャル・リアリティ）技術の進展によって、距離や空間を超えてつながることが叶うようになりました。今後

は仕事上でもアバターを通じた交流で成果をあげるバーチャル社会も拡大していくでしょう。仮想空間では、その人の意識や知恵、価値観が他者にどう受け入れられるかがコミュニケーションの鍵になります。実際に属している家庭や地域、外見などを超えて発揮できる「自分らしさ」が大切になる時代は、ある意味、パーソナリティの勝負といえるかもしれません。

情報社会で活躍するには「自分らしさで広く他者に受け入れられる力」のほかに「新しいものを生み出して広げていく力」も大切です。独創的な新しいものであっても社会に受け入れられなければ価値が出ません。広げていく方法はさまざまですが、たとえばSNSなどのツールを活用して多くの人とつながり、広めていく方法もあります。

2つの力を持つことで、これまでどおりのリアル社会と、情報革命で生み出されるバーチャル社会、その両方を活躍の場としていけることでしょう。

メタバース(仮想空間)



05・グローバル化と多様性の尊重

POINT

- ① グローバル化が進む状況と多様性を尊重する意義を理解する
- ② 日本企業に求められているグローバル人材の特徴を知る

国という枠組みを超えて、ヒト、モノ、カネ、経済が地球規模で拡大していく状況をグローバル化、またはグローバリゼーションといいます。日本企業の海外進出や、インターネットの発達で外国の情報が手に入りやすくなったことなどにより、海外に住む日本人は年々増え、日本に住む外国人の数も増えています。また文化や考え方が違う人々がともに生きる社会を、「多様性社会」(ダイバーシティ)といいます。海外支社に転勤になり、外国人として働くケースもあれば、日本にいても外国人と一緒に働くケースも増えています。

お互いの文化、考え方を尊重し、理解しようと努めることは大切です。たとえば、ヒンドゥー教では牛肉を、イスラム教やユダヤ教では豚肉を食べることを禁止しています。さらにイスラム教徒は1日5回の礼拝をします。企業ではこうした特性を理解し、社員食堂で使っている食材や調理方法を記載することや、礼拝の場所を用意するなど、

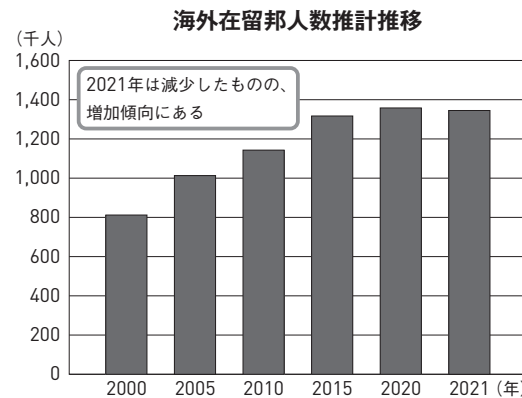
多様性を尊重する対応が進んできています。

このような情勢から日本企業では3つの特徴を持つ「グローバル人材」を求めるようになっていきます。

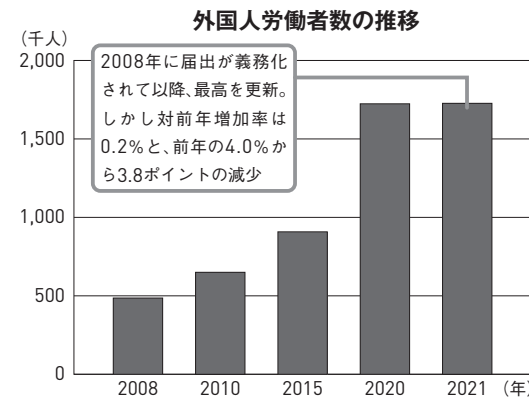
1つめは、異文化への対応力が高いことです。日本文化は世界のなかではかなり特徴的な文化です。日本文化だけが正しいとは思わずに、ほかの文化を理解し、組織として前進するための対応が大切です。2つめは、柔軟な思考を持っていることです。既存の考えにとらわれずに、新たなアイデアをつくり、枠組みを変えていく考え方が必要です。3つめは、コミュニケーション力があることです。相手の文化、習慣を理解し、交渉し、成果につなげていくコミュニケーション力は大変重要です。そのためには語学力も不可欠です。

もはや後戻りはないグローバル化と多様性社会にあって、障壁をつくらず組織の進展に寄与する「グローバル人材」をあなたも目指してください。

海外在留邦人数推計推移



出典：外務省「海外在留邦人数調査統計」より作成



出典：厚生労働省「外国人雇用状況」の届出状況まとめより作成

06・人生100年時代をどう生きる

POINT

- ① 自分の人生は自分で充実させようとする生き方が大切
- ② 「マルチステージの人生」に大切な3つの無形資産

日本の平均寿命は世界のトップです。厚生労働省が発表した「令和3年簡易生命表」によると、2021年の日本人の平均寿命は女性が87.6歳、男性が81.5歳でした。これまで平均寿命が10年ごとに平均2〜3歳のペースで上昇しており、さらに医学が進歩することを考えると、これからの日本人は100歳以上生きる時代を迎えることになりそうです。

これまでの多くの日本人は、人生を3つのステージでとらえてきました。1つめが「学校で教育を受ける時期」、2つめが「仕事に専念する時期」、3つめが「引退後の時期」です。

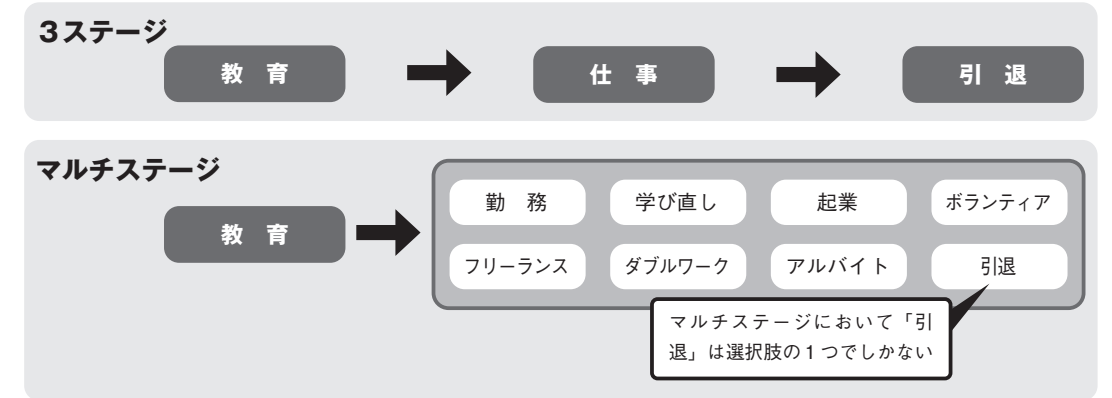
では、人生100年時代ではどんな生き方が必要になってくるのでしょうか。それは、3つのステージを受け身でこなすのではなく、自ら意識的に学び続け、視野を広げて、新しいことにチャレンジし、自分の人生を自ら充実させようとするマルチステージの生き方です。

「人生100年時代」という言葉はロンドン・ビ

ジネススクールのリンダ・グラットン教授とアンドリュー・スコット教授の著書『LIFE SHIFT(ライフ・シフト)：100年時代の人生戦略』(東洋経済新報社、2016年)の中で提唱されたことからはじまりです。著者たちは、100年生きることを災禍ではなく恩恵にするために、「3ステージの人生」から多様なステージを持つ「マルチステージの人生」への移行を提案しています。それには有形資産でなく、3つの無形資産を築くことが大切だとしています。3つの無形資産とは、所得を得るためのスキルや知識である「生産性資産」、心身の健康を維持するための「活力資産」、変化に柔軟に向き合い、新しい経験をしていこうとする「変身資産」です。

マルチステージでは人生の可能性が広がっています。3つの無形資産を築くことで、さまざまな選択肢を増やしていきましょう。人生の主人公は自分という主体性を持ち、仕事に取り組むなかで資産形成の力を培っていくことが大切です。

3ステージとマルチステージ



07・なぜ働く？ どう働く？

POINT

- 1 働くことを通じて社会や人の役に立っていることを認識する
- 2 働くことを通じて自己の欲求を追求できる視点を持つ

働くことに対する考え方の1つに「傍（はた）を楽（らく）にする」というものがあります。傍（はた）とは周囲や世の中の人を指します。

私たちは働くことで給与を得ることはもちろん、たとえ間接的でも誰かの役に立っていることを忘れてはなりません。社会に求められたことが仕事として存在し、「需要」と「供給」の相互ネットワークのなかで、社会も私たちの生活も成り立っているのです。

アメリカの心理学者アブラハム・H・マズローの欲求段階説をご存じでしょうか。人の欲求は5段階のピラミッドのように構成されていて、低次の欲求が満たされることで高次の欲求を求めるようになるというものです。

ピラミッドの第一階層は「生理的欲求」、第二階層は「安全欲求」、第三階層は「社会的欲求」です。そして第四階層が「承認欲求」であり、こ

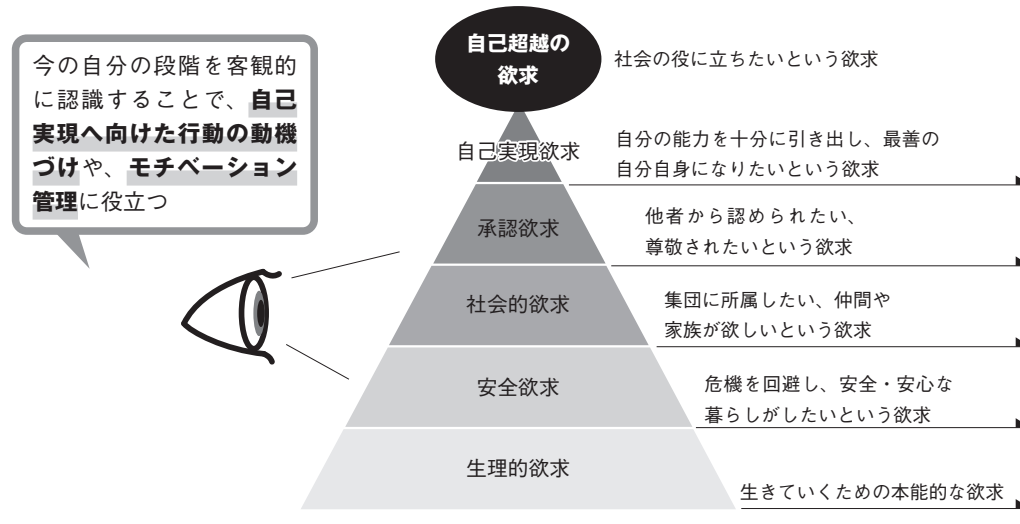
こまで満たされると第五階層「自己実現欲求」に至ります。

ちなみにマズローは晩年、欲求5段階の先にさらに高次の階層があると発表しました。「自己超越の欲求」です。仲間、社会のために役に立ちたいといった自分のエゴを完全に超えた欲求で、人口の約2%がその階層に辿り着くとしています。

仕事は、私たちの人生を大きく占めています。会社に勤める人の労働時間を8時間として、通勤、睡眠、食事、家事や入浴時間を差し引くと、平日は1日のうち3時間程度しか自由な時間がとれない計算になります。残業などで自由時間がとれない日もあるかもしれません。

日々の仕事を通じて「傍を楽にしている」ことや、すでに満たされている欲求を認識する視点は、人生の充足感を得るためにとても大切になります。

マズローの基本的欲求



08・ワークライフバランス

POINT

- 1 「仕事」と「生活」のバランスをとることで相乗効果が生まれる
- 2 ワークライフバランスはQOLの高い暮らしを演出してくれる

人生において仕事に占める時間は長く、多くの人が家族や友人よりも職場の人と関わる時間のほうが長くなります。職場での人間関係がうまくいき、仕事が充実していると気分が良く、生活そのものも幸せに過ごせます。反対に、職場や仕事でうまくいっていないと気持ちが切り替えられず心身が休まらないことになりかねません。多くの人にとって仕事と生活は相互に作用し合う、切っても切れない関係です。

仕事（ワーク）と生活（ライフ）をちょうど良いバランスにコントロールしていくことが「ワークライフバランス」の考え方です。

その人の価値観に基づいてバランスをコントロールすることができると「仕事」と「生活」に相乗効果が生まれ、どちらにも良い展開が期待できます。

しかし、職業や立場、状況によっては、仕事と生活を区別することが難しい場合もあります。その場合は「ワークライフブレンド」という新し

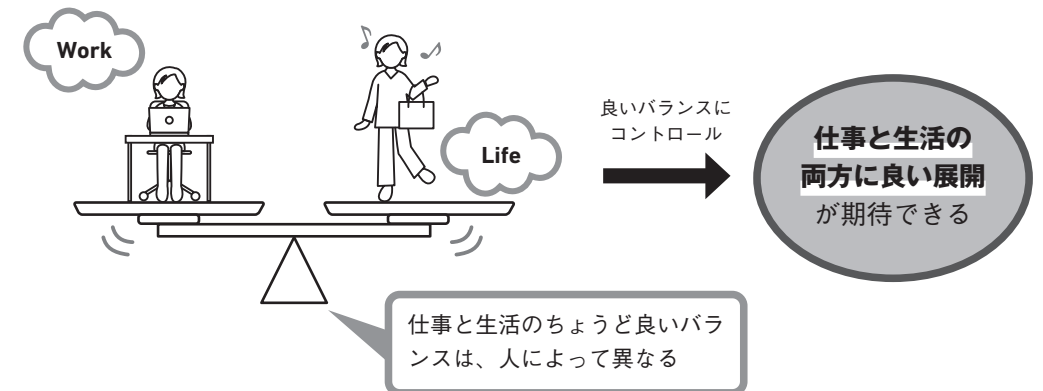
い働き方があります。

企業環境整備によりますが、育児や介護と仕事を両立する場合など、出勤時間や退社時間を調整したり、テレワークやリモートワークを取り入れられたりと、仕事と生活を区別せずにバランスを取っていく働き方です。仕事と生活を融合させることによって相互に良い影響を与え合うことが期待できます。

ワークライフブレンドには、オーバーワークに陥りやすい、職場の評価を得られにくい、などのデメリットも現在はありますが、柔軟な働き方への整備と理解が進む社会において、今後課題を解決しながら推進されていく働き方であると予想できます。

ワークライフバランスを意識して働くことは、QOL（クオリティ・オブ・ライフ＝人生の質）を高める大切なポイントです。自分にとっての仕事と生活のバランスについて、常に意識を向けるようにしましょう。

ワークライフバランス



09. 社会人基礎力を点検し強化していこう

POINT

- 1 社会人基礎力を知りキャリア形成のヒントにする
- 2 自分の行動特性、思考特性を知ることが社会人基礎力を高める第一歩

経済産業省は「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、「社会人基礎力」を2006年に提唱しました。その後、人生100年時代といわれるようになったことを背景に、2018年に「人生100年時代の社会人基礎力」と定義し直しています。いずれも3つの能力と12の要素が重要であるとまとめられています。

3つの能力とされるのは、「アクション（行動力）」「シンキング（思考力）」「チームワーク（協働力）」です。これらは、どの職業に就いても、どの会社に勤めても、共通して必要な能力といえます。

さらに新たな定義では、これらの3つの能力を「どう活用するか（目的）」「何を学ぶか（学び）」「どのように学ぶか（統合）」の3つの視点で繰り返しリフレクション（振り返り）を行うことが重要であると付け加えられました。また、社会人基礎力はいくまで自分のスキルを活かすための「OS」であり、そのうえに専門性などの「アプリ

をいかに構築し稼働させていけるかが、キャリア形成には必要だとしています。

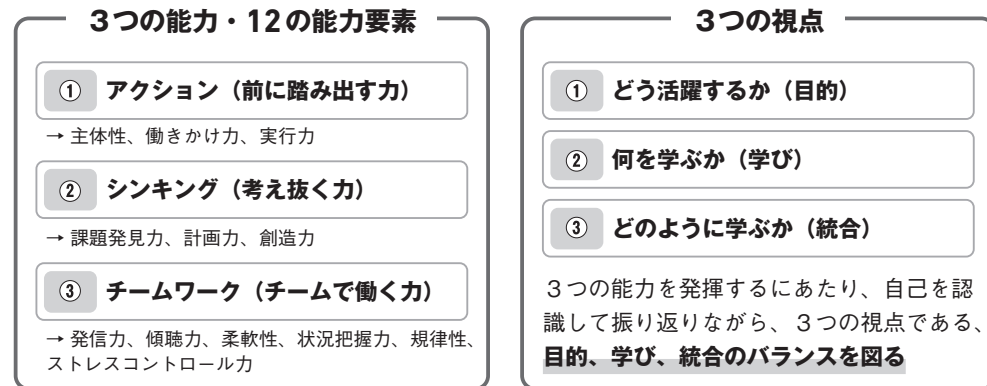
社会人基礎力は、いわば経済産業省が日本企業で働く人たち全員に強化してほしい、行動特性、思考特性であるといえます。行動特性、思考特性とは、物事をどう行い、どうとらえ考えるかの傾向性です。

優れた成果を生み出しやすい傾向性、能力を「コンピテンシー」と呼びます。自分のコンピテンシーを把握することは自己PRに結びつけられることから、就職活動の期間にコンピテンシー診断を体験した人も多いのではないのでしょうか。

一方、コンピテンシーとは逆に、行動特性、思考特性には、成果を生み出しにくい傾向性もあります。たとえば、飽きっぽい、優柔不断、悲観的などの傾向性です。

自分にはどんな傾向性があるのかに目を向け、しっかり自覚していくことが社会人基礎力を高める第一歩です。

人生100年時代の社会人基礎力



10. 自分自身をアップデートし続けよう

POINT

- 1 「WILL-CAN-MUST」の3要素をバランスよく保つ
- 2 自分に必要な知識やスキルがあれば早めに補うようにしよう

社会人としてやりがいをもって成長していくためには「WILL(したいこと、夢や目標)」「CAN(できること、経験や技術)」「MUST(しなければいけないこと、役割や使命)」の3要素をバランスよく保つことが大切です。

多くの「WILL」を抱き、いざ社会人としてスタートしてみると、「WILL」とはまったく違う配属先であったり、「CAN」だと自認してきたことが発揮できずに自信をなくしたり、「MUST」が果たせず悶々としたり……。厳しい現実に直面する新人は少なくありません。

そんなときこそ、3つの要素を今置かれた状況で再度洗い出してみましょう。いつか自分が実現したいこと「WILL」をあげ、自分がしなくてはいけない役割「MUST」が実践されているか、自分にできること「CAN」は何か、を点検していくのです。3つの要素から得た情報をまとめてみると、具体的な目標として設定することができます。「CAN」を増やすために、新たな勉強や資

格取得などで自分自身をアップデートしていく必要性を感じる場合もあるでしょう。社会人になってからの勉強や資格取得には、忙しい合間を縫って時間やお金を投資するわけですから、まず目指したいのは「確実なリターン」です。そのためには自分がやりたいことより「仕事で必要なこと」をターゲットにすると良いでしょう。

また時間捻出の難しさからも短期決戦ではなく長期的視野で取り組むこともコツです。必要だと思えば、先延ばしにせず早い段階で挑戦しましょう。早くに知識や資格を得ることができると、その分リターンの期間が長く、次のチャンスにもつながりやすくなります。

社会人に人気のコンテンツは、マーケティング・ビジネス関係の知識、投資・金融の知識、IT・ネットに関する知識、語学などさまざまあります。自分に必要な知識やスキルを補い続けることで、社会人人生は一層輝いていきます。

自分自身をアップデートし続けよう

